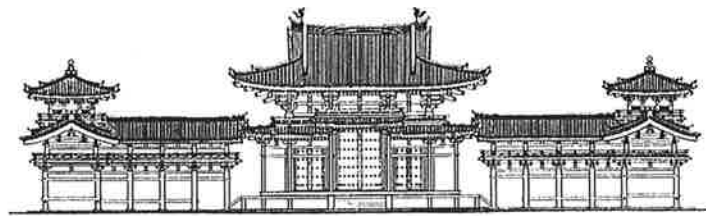


日本イコモス国内委員会

JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第4号 1998年12月2日 発行



目次

1998年次総会での協議事項	石井 昭	1
1998年第4回理事会(拡大理事会)報告	藤木良明・他	2
CIAVの1998年総会(サントドミンゴ)に出席して	大河直躬	6
歴史都市集落委員会ストックホルム大会	宗田好史	10
ブルガリアICOMOS訪問団報告	前野まさる	12
歴史的建造物構造補強小委員会報告	日高健一郎	13
研究会「近現代建築の保存について考える」	田原幸夫	14
ルーマニア・プロポタ修道院の保存修復事業	三宅理一	16
ドイツ・イコモス主催の国際会議に出席して	松本修自	24
事務局日誌(1998/9/1~11/30)	事務局	26
お知らせ - 5件	委員長・事務局	27

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES/国際記念物遺跡会議

表 紙 : 平等院鳳凰堂
COVER : Byodoin Hoodo

1998年次総会での協議事項 石井 昭

来る12月12日の午後1時から東京神田の学士会館において開催する「日本イコモス1998年次総会」では、来年次の活動方針、予算案など、恒例の諸議題に加えて、次のような二つの重要議題を用意し、会員の皆様からご意見をうかがいたいと考えています。

その第1は「国際専門分科委員会活動への今後の対応について」です。ご承知の通り、現在、ICOMOSには 総数19 に及ぶ INTERNATIONAL SPECIALIZED SCIENTIFIC COMMITTEE が設置されており、うち 13 の委員会に、VOTING MEMBER あるいは ASSOCIATE MEMBER の資格で、わが日本イコモスから選任された計20名の方々が参加しておられます。

参加 13委員会 95年以前選任 -① HISTORIC TOWNS AND VILLAGES, ② TRAINING, ③ HISTORIC GARDENS AND SITES, ④ WOOD. 96年選任 -⑤ ANALYSIS AND RESTORATION OF STRUCTURES, ⑥ UNDERWATER CULTURAL HERITAGE, ⑦ VERNACULAR ARCHITECTURE, ⑧ EARTHEN STRUCTURES, ⑨ CULTURAL TOURISM. 97年選任 -⑩ LEGAL ISSUES, ⑪ ARCHAEOLOGICAL MANAGEMENT. 98年選任 -⑫ PHOTOGRAMMETRY, ⑬ CULTURAL CORRIDORS.

未参加 6委員会 ① STONE, ② ROCK ART, ③ STAINED GLASS, ④ ECONOMICS OF CONSERVATION, ⑤ WALL PAINTING, ⑥ RISK PREPAREDNESS.

こうした現状を踏まえつつ、総会の席上では、(1) 日本イコモスの活動と国際委員会の活動とを今後どのように結び付けるべきか、(2) 国際委員会に参加する MEMBER の選任、とりわけ後継メンバーの選任を、今後どのように進めるべきか、等々について建設的なご提言をお聞かせいただければ幸いです。

議題の第2は「日本イコモスの組織に関する中長期的方針について」です。ご承知の通り、3年に1度の役員改選期を迎えていた昨年総会では、前任理事会からの提案という形で、次のような短期的方針を示して、ご了承を得ました。

会員数・会員構成 (a) 世界88カ国にある各国内委員会の現況に照らせば、日本イコモスの現会員数(97年登録・140名)はおおむね適正である。(b) 事務局の態勢が確立するまで、急激な増員は難しい。(c) 当面(97-98 両年中)、現会員数の2割を最大限度として新会員を迎え入れる。(d) 入会希望者を推薦するにあたっては、ICOMOS本来の国際的諸活動を重視し、これまで手薄であった専門分野・職業分野に属する意欲的な人材を優先するように努める。

98年以降の事務局 (a) 従前どおり渡辺保弘氏にお引受け願ひ、同氏主宰の「文化財工学研究所」内に置く。(b) 総会の承認を得て、規約上の制限にかかわらず、同氏を理事として再任する。(c) 事務局への負担を軽減すべく、委員長・全理事による会務の分担処理をいっそう徹底する。(d) 会費外収入の獲得に努め、それによって可能なかぎり、年次予算の中に事務局人件費の一部を計上する。

また、中長期的方針についても、昨年の総会では時間不足で議論を尽くせなかったとはいえ、「日本イコモスの将来」と題して、以下のような問題提起を行いました。

会 員 - 会員数の増加は望ましいか。- 入会希望・推薦・入会承認のルールをどうするか。- 団体会員、維持会員(= 賛助会員)は可能か。

財 政 - 会費は値上げできるか。- 会費外収入を確保する望ましい方法は何か。- 活動経費個人負担の原則は貫けるか。

事務局 - 2001年以降、事務局を何処に置くか。- 誰が管理運営の責任を負うか。- 経費をどうするか。

当 INFORMATION 誌の第1号～第4号(本号)に逐次報告されている通り、今期の理事会(拡大理事会)は上述の諸問題について継続審議を重ねてきました。来る12月12日の総会では、その概要を紹介するとともに、ご出席の方々から忌憚のないご意見をうかがうことにしたいと思っています。

1998年 第4回 理事会（拡大理事会）報告

1998年第4回理事会（拡大理事会）が、去る10月24日（土曜日）午後1時30分から午後5時30分まで、東京・神田の学士会館（303会議室）で開催された。出席者は、委員長：石井 昭、顧問：伊藤延男・稲垣栄三、理事：稲葉信子、岡田保良、田原幸夫、日高健一郎、藤木良明、藤本 強、前野まさる、宗田好史、山田幸正、渡辺保弘、小委員会主査：益田兼房、事務局員：我妻綾子（陪席）の各氏であった。

議事に先立ち、委員長より以下の要請があった。

- ① 理事会終了後、憲章等に関する第一小委員会が引き続き開催されるので、理事各位はオブザーバーとして参加されたい。
- ② 理事会（拡大理事会）報告の執筆者は既定方針にしたがい輪番制をとるものとし、今回は広報担当藤木理事、次回は年次総会報告と併せて庶務担当渡辺理事に担当願いたい。

〔報告事項〕

1) 日本イコモス国内委員会関係

石井委員長より以下①～⑥の報告がされた。

① 研究会

憲章等に関する公開研究会が7月11日午後5時より学士会館で開催され、40名近い出席があった。第1小委員会の活動についてはインフォメーション誌第3号に掲載されている。

② ICOMOS STRATEGIC PLAN 1999～2002

西村本部執行委員、岡田理事、益田小委員会主査の提言を組入れ、国内、国際の両レベルにわたり委員長が作成した提案書を8月7日付けでパリ本部に送付した。その全文がインフォメーション誌第3号に掲載されている。

③ ICOMOS CULTURAL TOURISM CHARTER 草案に関する意見書

藤本強、稲葉信子、宗田好史、益田兼房の四氏に意見を求めたが、インフォメーション誌第3号で紹介した通りの内容で集約するのが困難であったため提出を断念した。そして、専門委員会の既定方針に沿って草案を完成することに異存はないが日本には多様な批判的意見がある旨を書簡で伝えた。

④ 次期本部執行委員立候補者の届出

次期本部執行委員立候補者として西村幸夫氏を推薦すべく8月7日付けで届出た。9月10～11日の諮問委員会で正式な候補者として登録された。

⑤ 次期本部各種役員立候補者の推薦

次期会長、副会長、事務局長、執行委員として4職 計5氏を推薦した。

⑥ JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌第3号

9月7日付けで発行した。編集・製作上に改善すべき余地があるので、今後とも関係者の間で協議する。

つづいて、前野副委員長より次の報告があった。

⑦ ブルガリア ICOMOS 交流と世界遺産見学の旅

9月24日～10月4日の日程で、ICOMOS 非会員を含む10名がブルガリアを訪問し、世界文化遺産7箇所を見学すると共に、ブルガリア ICOMOS と交流を図り、Step by step 方式の協定を結んだ。なお、訪問団にはストックホルムでの ICOMOS 委員長会議を終えた石井委員長がフランクフルトで合流した。詳細はインフォメーション誌第4号に報告の予定。

2) ICOMOS 国際専門分科委員会関係

石井委員長より以下の①～⑤について報告された。なお、①②についてはインフォメーション誌第4号に詳細が報告される予定。

- ① VERNACULAR ARCHTECTURE 年次会議がドミニカ共和国サント・ドミンゴで8月23, 24, 25日に開催され、大河直躬委員が出席した。
- ② HISTORIC TOWNS AND VILLAGES 年次会議がストックホルムで9月16, 17, 18日に開催され、宗田好史理事が出席した。
- ③ CULTURAL TOURISM 年次会議がノルウェーのレーロスで9月17, 18日に開催され、石井昭委員が出席した。
- ④ PHOTOGRAMMETRY 委員会日本代表として西村康氏を推薦した結果、正式に受理された旨の報が8月17日に委員長から届いた。
- ⑤ CULTURAL CORRIDORS 委員会日本代表として杉尾邦江氏を推薦した結果、正式に受理された旨の報が9月3日に委員長から届いた。

以上の委員会活動に関連して、「旅費支給は行われているか」の質問があり、「かつて支給されたこともあったが、現状では財政的に不可能である」と委員長から説明された。

3) ICOMOS 諮問委員会関係

9月10, 11日にストックホルムで開催され、石井委員長、西村執行委員が出席。日本イコモスに直接関係する主な議題について以下のとおり委員長より報告された。

- ① ICOMOS STRATEGIC PLAN は小委員会で継続審議し、最終案を各国に後日配布の上、メキシコ総会に諮る。なお、日本からの提言は主体が明確であり、会議中に何度か引用された。
- ② DOCTRINAL TEXT は4本を審議、内「VERNACULAR」「WOOD」「TOURISM」については最終案を承認、「STRUCTURES」については保留とした。
- ③ 12th ICOMOS GENERAL ASSEMBLY, MEXICO 1999 の内容は、メキシコ国内委による原案を大筋において承認、細部については逐次決定することとした。
- ④ 次期本部各種役員選挙に関して、各国国内委員会から提出された立候補者が一括承認された。
- ⑤ ICOMOS 本部納入会費の改定に関し、国情に応じ3区分（一人当たり20, 30, 40 US\$）とする原案が承認され、早ければ1999年メキシコ総会を待たずに実施される。ちなみに、日本は40 US\$ / 人である。

[審議事項]

1) 日本イコモスの組織に関する中長期的課題(継続)

石井委員長より97年9月理事会決定、97年12月総会承認の現行方針の再確認が行われ、組織拡大政策をとっているアメリカを対極事例としながら、以下の中長期的課題に関する「委員長試案」が提示された。席上、大筋は承認されたが、いくつかの保留意見が提示された。

- 会 員
- a. 現会員数(150名)はおおむね適正であり、今後、年間15名程度の増員が好ましい。
 - b. 入会希望、推薦、入会承認の手続きについては、推薦書提出に先んじて、理事会に対する事前協議を求めているかどうか。これに対し「書類提出後、理事会が承認、不承認を決定すればよい」とする意見も出された。
 - c. 財政上の目的を主にして団体会員、維持会員を募るのは現状では馴染まないものとし、現在の個人会員主義を原則とする。

- 財 政**
- a. 日本イコモスの実状からして会費の値上げは容易でない。
 - b. 出版協力、講演会活動等による収入、加えて研究補助金、寄付等の獲得により財政的な拡充を図る。
 - c. 活動経費個人負担の原則は貫かざるを得ない。過大な負担が集中しないよう、なるべく3年任期にしたがって役員、委員の交代を図っていく方針とする。

これに対して、「ボランティアによる受益者は誰か（日高）」との疑問が提示され、「ICOMOSは国際NGOであり、受益する対象は文化財そのもの（Monuments and Sites）である」との見解（稲葉、宗田）が提示された。

事務局 2000年12月末までは現体制をとる。2001年1月以降は、①[事務局そのものは移転せず、常任事務局長制をとる方法]と、②[事務局を移設し、新体制を敷く方法]が想定できる。いずれにしろ、この問題と並行して、会員増加、財政拡充を併せて検討することになる。これに対して、「1000人以上の会員を確保しないと独立事務局を設置し、有給事務員を雇用することは困難（藤本）」「アメリカ方式の supporter の導入が今後の課題になるのではないか（前野）」との意見が出された。

上記諸項目について、今年次総会に提示し、審議することを承認した。

2) 新規入会者、および退会者の承認

下記2名の入会希望ならびに1名の退会希望が石井委員長ならびに岡田理事から説明され、審議の結果、承認した。

入会希望者	現 職	推薦者
増井 正哉	奈良女子大学人間環境学科助教授	岡田保良・益田兼房
松本 健	国士館大学イラク古代文化研究所教授	岡田保良・宮本長二郎
退会希望者		
山本 忠尚	1998年10月12日付書面により本人申出	

3) 当面の事業計画

① 研究会・講演会・懇親会・他

11月7日「近現代建築の保存について考える」研究会をJIA建築会館において開催する。ドコモモ・ジャパンの設立準備委員会が発足したとの報告と併せて、研究会の趣旨が田原事業担当理事から説明された。

② 文化財保護関連憲章等研究班（第1小委員会）

12月12日 pm5:00~7:30 公開の「文化財保護関連憲章等研究会」を開催する予定。

③ 出版協力・市民講座協力・他（第2小委員会）

近畿日本ツーリスト出版部刊「世界遺産を旅する」は9冊刊行、残3冊。

日本ユネスコ協会連盟「世界遺産ハンドブック」は企画が進行中。

江東区市民講座「世界遺産を旅する 日本・東南アジア」が12月9日より開始する。

④ 歴史的建造物構造補強研究班（第3小委員会）

11月3日に京都で小委員会を開催する。STRUCTURES 国際専門委員会がストックホルムでの諮問委員会会議に提出した Doctrine Text が不承認になった事実を踏まえ、日本としての対応を検討する。その成果はインフォメーション誌第4号に掲載する予定である。

4) 日本イコモスインターンプログラムの準備(継続)

文建協、文化庁と協議の結果、しっかりした受け入れ機関がないと公的助成は難しいとの見

解を得、文部省奨学金を前提に、芸大、文建協などの協力のもとに受け入れを行う方法などを継続して検討するとの方針が前野副委員長から提示され、これを了承した。

5) ブルガリア・イコモスとの今後の交流計画

ブルガリア世界遺産見学の旅の初めとお終りにブルガリア ICOMOS 執行部と会議を持ち、「ブルガリアの世界遺産候補となり得るレベルの Vernacular で Secular な木造建築についての Pilot project sites を定めて共同作業を進めたい」との合意に達した。また、日本政府もブルガリアとの交流を重視する気運にあるので、機を捉えて関係を深めたいとの意向が石井委員長から述べられ、これを了承した。

6) 12th ICOMOS GENERAL ASSEMBLY (MEXICO 1999)への対応

インフォメーション誌第3号巻頭に日程と参加要領を掲載し、会員諸氏に積極的参加を呼びかけた。投票権(18票)の配分など、具体的対応については参加者が判明した段階で協議したいとの方針が委員長から示され、これを了承した。

7) 日本イコモス 1998 年次総会のための議案書の作成

昨年の例に倣い分担執筆方法をとることとした。委員長より、事務局との相談結果を踏まえ「議案」を近日中に理事・主査に送付するので協力されたい旨、要請があり、これを了承した。

8) INFORMATION 誌第4号発行計画

山田理事より、本号の編集内容に付いて報告があり、これを了承した。

9) 22nd SESSION OF THE WORLD HERITAGE COMMITTEE(京都)への対応

石井委員長、西村執行委員が ICOMOS Delegation のメンバーとして参加するが、会議日程に余裕が乏しいので、日本イコモス国内委員会としての企画は差し控え、事情が許せば非公式の懇親会を行うこととした。

10) 世界遺産登録候補「日光の社寺」についての ICOMOS による審査への対応

審査団に対する日本イコモスの協力と助言を求める要請状が、11月16日付けで Jean Louis Luxen 事務局長から届いたとの報告が石井委員長からされた。なお、中国建築との違いを説明する必要があるとの注意が伊藤顧問からされた。

11) その他

1998 年次総会を予定どおり 12 月 12 日(土)午後1時より開催するものとし、それに先立ち午前に拡大理事会を、総会終了後の午後5時より研究会を開催することを確認した。

(理事会報告 文責：藤木 良明 ・ 石井 昭)

CIAVの1998年総会（サント・ドミンゴ）に出席して

大河 直躬

I はじめに

今年のCIAV(イコモスのVernacular Architectureに関する国際専門分科委員会)の年次総会は、中米のドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴで、8月24日から26日までの日程で開催されました。当初の計画では、2月に西アフリカのセネガルの首都ダカールで開催の予定でしたが、地元の事情で変更されました。

サント・ドミンゴで開かれた理由は、コロンブス(1451～1506)の新大陸発見(1486)後、彼の弟のバルトロメ・コロンによって、1496年に新大陸最初の本格的な都市として建設されたサント・ドミンゴでは、建都500年を祝う種々の行事があり、その一環としてバナキュラー建築の保存と活用についての国際シンポジウムが開かれることになり、それに協力したからです。昨年バンコックにおけるCIAVの総会も、地元タイにおける国際シンポジウムに協力して開催されました。これは良い方式だと思います。

今回のシンポジウムの主題は、「バナキュラーなPueblos(町・村)、その保存と開発」で、日本流に言えば「町並み、その保存と開発」になるでしょう。主催はCIAVとドミニカのイコモス委員会で、サント・ドミンゴ市等が後援しました。サント・ドミンゴの市壁に囲まれた旧市街(the Colonial City)は、世界遺産に登録されています。

日本からの参加は、残念ながらCIAVのvoting memberである筆者だけでした。筆者にとっては未知のカリブ海地域だということもあり、はるばる出掛けたのですが、いろんな面で貴重な体験でした。以下に、全体の経過、シンポジウムの内容、CIAVのミーティングの審議事項の順に紹介したいと思います。

II カリブ海地域の光と影

8月23日のニューヨークからサント・ドミンゴへのフライトが5時間半遅れ、タクシーで薄暗く人通りの絶えた旧市街の路地の奥にある指定のホテルに着いたのは、11時を過ぎていました。ホテルは石造の民家を再生したもので、大戸を叩いて潜りから入れてもらいましたが、スペイン語しか話さない留守番が一人いるだけで、会議についての情報連絡は一切なしという、心細い状況でした。

しかし、案内された客室は、厚い石壁と高い根太天井を持つ部屋で気に入りました。朝食をとった中庭はスペイン風で、19世紀の建築と推定しました(写真1, 2)。翌朝訪ねた会場は、大聖堂前の広場に面した美術館でした。大聖堂(写真3)は、1540年に完成した新大陸最古の教会で、内部はゴシック様式です。ここには最近までコロンブスの遺体を納めた柩が安置されていたのですが、探しても無く、聞くと最近オサマ川対岸に建設されたLighthouseと呼ばれる超近代的コンパウンドに移されたということでした。

シンポジウムは、1日目と3日目が参加者の報告に当てられ、2日目は約60キロメートル西にあるAzua市の郊外の農村集落を訪ねました。CIAVのミーティングは3日目の夕方であり、その後深夜にかけてお別れパーティが郊外のレストランで開かれました。4日目の午前に旧市街の見学がありましたが、筆者はフライトの都合で欠席しました。

シンポジウムの報告者は、中南米地域から8名(ドミニカ3、メキシコ2、ハイチ、グアテマラ、コロンビア各1)、その他の地域から8名(ドイツ、オーストラリア、スペイン、ノルウエー、フィンランド、イスラエル、カナダ、日本各1)で、傍聴者を加えると約30名の参加者でした。注目されたのは、地元カリブ海地域の参加者に30歳前後の若い研究者が多かったことです。報告の内容はあとで紹介します。

2日目の朝は、ハリケーンの影響で台風並みの暴風雨でしたが、現地に着く頃には雨も上がりました。バスの車窓から見るドミニカの風景は興味深いものでした。ドミニカ共和国は、イスパニョラ島の東部約3分の2を占め、西側はハイチです。国の大きさは日本の北海道くらいで、中央に標高3175メートルのドウアルテ山があります。南海岸に面したサント・ドミンゴ市は人口約200万、カリブ海諸国のなかでは最大の都市です。



写真1 民家を再生した Hostal Nader. 1階の角の右の窓の部屋に泊まりました。



写真2 Hostal Nader の中庭



写真3 サンタ・マリア・ラ・メール大聖堂。1540年に完成。右はコロンブスの銅像。



写真4 コロンブスの息子が建てたアルカサル の2階テラス。下にオマサ川が流れる。

サント・ドミンゴの新市街は、超高層のビルこそありませんが、高層ビルもいくつかあり、郊外の高級住宅地には、日本ではうらやましいほどの一戸建ての立派な住宅が並んでいます。市街から外れると、平地には砂糖黍畑が続き、丘陵地にはシャボテンが疎らに生えています。大きな工場は見かけません。主な産物の砂糖、それに飛行機やクルージング船で大勢訪れる観光客、米国の都市への出稼ぎが、主に経済を支えているようです。

見学した集落は、元々は16世紀にスペイン人によって開かれた都市のあった場所ですが、海賊の攻撃を避けるために都市が高台に移り、その後に農民が住み着いたということです。地図も案内パンフもなく、ただ歩くだけだったので、詳細なデータは分かりませんが、人口1000人、戸数百数十戸前後の集落だと推定しました。

この集落の保存と生活環境改善が始められたのは15年前からで、教会や僧院の遺跡を調査をしているうちに、まわりの集落も保存しようということになったようです。

住宅は写真(5～8)のように、小規模で素朴なものです。古くは茅葺きで、土塗りの大壁造りだったのが、次第に鉄板葺き・板壁になり、さらに最近ではブロック造も建てられています。第一印象ではとても素朴ですが、住宅の間取りと外観には明確な類型が認められます。標準的形式は、中央に居間(台所と食事室も兼ねる)、その左右に寝室があり、それぞれに入口がつきます。寝室が片側にあるだけの小規模な家や、妻入りの家(片側にベランダと居間、その横の前後に寝室)もあります。最初の生活環境改善として、敷地の後方に統一された形式・構造の改良便所を建て、また道路を改良したということです。試みに使わせていただいた便所の便器は、石臼状の石に丸い穴を開けたものでした。住民はとても人なつっこく、屋外も屋内も自由に写真をとらせてもらいました。

これらとほぼ同じ形式の住宅は、サント・ドミンゴの町はずれにもあり、また旧市街の周辺部にも、その原則を守って石造で建てた家があります。すなわち、このような住宅がドミニカのバナキュラーな建築の核心だということが、次第に分かってきました。



写真5 Azuaの集落。ペルトボトルをボールの代わりにして野球をしている少年たち。



写真6 茅葺きで板壁の民家。このような規模と形式の家が一番多い。

昼食は集落の集会所（鉄骨造の吹き放ち）で、村人の手作り料理をいただき、その後で住民のリーダーたちの説明を聞きました。この時に向かいあわせに座ったC.L.Pile氏は、カリブ海地域出身で（出身地は発音が難しく聞き漏らしました）ブラジルの大学で学び、現在はドミニカでTropical Architectureをテーマに博士論文のための調査を行っているという好青年でした。彼の話に隣の地中海沿岸の国から来たCIAVの委員が「そんなテーマで博士論文ができるのかね」「温度差による違いでも調べるのかね」とからみました。Pile氏は冷静に、Vernacular Architectureが彼らにとって現在の最重要な研究課題であることを説明しました。このCIAV委員は後で「Azuaの集落はmess（がらくた）だ」と言っていました。Vernacular Architectureに対しての関心と理解が、中南米地域と先進国でかなり異なることは、シンポジウムでも次第に明らかになりました。

4日目の朝は7時にホテルを出て、タクシーで空港に向かいました。海沿いの道路の両側は公園のように美しく整備され、ジョギングする観光客を多く見かけました。海は波もなく、空は晴れ渡っています。観光ポスターに出てくるカリブ海の風景です。サント・ドミンゴの旧市内のアルカサル（写真4、コロンブスの息子の邸宅、現在は歴史資料館）やコルテス（メキシコ征服者）等の立派な石造邸宅にも、外国人観光客が群れていました。当然のことながら、観光客目当ての詐欺まがいの行為をする青年たちを目にしました。

このような外国人観光客の目に映る景観と、Azuaの住宅と住民の暮らし方の、どちらがカリブ海地域のより重要な文化遺産なのかという疑問を抱いてドミニカを後にしました。

III シンポジウムの内容

シンポジウムで、Vernacular Architectureについて、熱心で内容のある報告を行ったのは、カリブ海地域の研究者でした。メキシコのMs. R.M.Sanchezは、メキシコでは1980年頃からVernacular Architectureの研究を始めるようになり、それ以前はそのような概念はなかったと研究の発展を紹介し、Vernacular Architectureはeveryday lifeそのものであり、そのカタログを国内のみならず、世界に提供することが課題だと述べました。



写真7 民家の居間。隅に台所があるが、水道はまだ引かれていない。奥は寝室。



写真8 土塗りの大壁造の建物も残っている。現在は住宅には使われていない。

グアテマラの Ms. B.Nino も、ほぼ同じ考えを述べ、墓地もそのなかに含まれると述べたのは、適切な指摘でした。なかで一番注目されたのはドミニカの G.Ripley 氏で、Azua よりもさらに素朴な集落の調査をビデオで詳しく紹介しました。住宅の形式・材料等だけではなく、住民の暮らし方と考え方も捕らえています。彼も、このような調査の結果を建築家のみならず、一般の国民に紹介することが非常に重要だと考えています。なかなかユニークな研究者で、最後に奇声をあげて跳び上がるパフォーマンスを聴衆もやらされました。

域外の報告者の多くは、民家や集落の個別研究を発表しましたが、個々の内容は面白くてもシンポジウムの主題から外れていました。そのなかでフィンランドの Ms. K.Kovanen は、現在動植物の調査や、集落の年代的变化の研究に着手していること、また、グループ保存の法律はあるが適用例はないこと、単体保存された民家やチャペルで放置されて荒廃しているものがあることを、スライドで紹介しました。北欧は民家の保存が世界で最も早く始まった地域ですが、そこでも従来型の保存が行き詰まっていることが分かりました。

筆者の報告は *New Movements in the Preservation of Vernacular Building in Japan* と題して、新しく始まった所有者自身による保存と再生の例や、住民参加の活用例を紹介し、このような動きの背景には *a new consciousness of history* があること、保存と開発の対立を解決するにはそれが不可欠であり、それを *support and promote* する必要があることを述べました。この筆者の主張は地元研究者の理解を得たようで、前述の Ripley 氏から、” *Good presentation!* ” という共感の言葉をいただきました。

最後のまとめは、CIAV の委員長のマハト氏 (ドイツ) が行い、*vernacular architecture* の研究と保存がいまスターティングポイントに立っていること、その定義や解決を見いだすことは難しく、*vernacular architecture* は、*traditional, local, rural* な建築のいずれでもないと言いました。参加者の大部分も、*vernacular architecture* は形式・構造だけではなくて、*the way of life, attitude, living coordination* などと幅広く考えているようでした。

IV CIAV のミーティング

ミーティングでの重要審議事項は、来年のメキシコでの総会への提出が予定されているバナキュラー建築の保存に関する憲章の最終審議と、今後の活動予定でした。

憲章の最終草案については、昨年各国のイコモス委員会にコメントが求められ、日本からは昨年9月に、規定に従ってパリの本部宛にコメントが送られました。しかし、席上で提出された受領コメントのリストを見ると、エクアドル・ノルウエー・フィンランド・カナダの各国委員会、米国のバナキュラー・グループ、個人3名で、日本の名前は見当たりません。その点についてマハト氏にたずねると、受け取っていないの一点張りです。さらに、「提出の後、石井教授が貴方に会って、そのことを話したはずだが」と言っても、受け取っていないと答えるだけです。事情通の人が後で、パリの本部に書類を送ったら処理に2年かかるよ、と言っていました。つまり、パリの本部では、本部関係の事務は処理するが、専門分科委員会との連携はほとんど機能していないようです。

このことは、今後の日本イコモスの活動でも十分心得ておく必要があります。専門分科委員会関係の書類は、本部のほかに、委員長と書記にも送るのが望ましく思います。

肝心の憲章については、最後の段階でさらに字句の修正案が出て、2時間ほどかけましたが、草案通りの提出が決まりました。筆者は、そのようなことに時間を費やすより、今後の活動方針の検討が大事だと思うのですが、そこには関心が向かないようです。

今後の活動は、1999年のメキシコでのイコモス総会の期間にミーティングを行う他に、5月にルーマニアでミーティングを行うという案がマハト氏 (ルーマニア生まれ) から出ましたが否決されました。委員会で出版予定の図集” *Vernacular Architecture – Living Tradition around the World* ” は、まだ9国からしか集まっておらず、さらに追加を得て出版する予定。オランダの委員から提案があつて決定した文献目録の収集は、五か国から提出されただけ。また現在作成過程にある *Vernacular Heritage* の保存のためのガイドラインの草案が提出されました。CIAV の活動は、まだ少数の委員 (64人の委員のうち多い時で十数人程度が参加) の活動によるところが大で、委員の個人的関心にひきづられることも多く、当分はこの状況を我慢してゆかねばならないようです。(おわり)

イコモス専門分科委員会

「歴史都市集落委員会 (CIVVIH)」ストックホルム大会報告

宗田 好史

標記委員会の年次大会が9月16～18の3日間、スウェーデンのストックホルムで開催されました。上野邦一代表委員の要請で、代理出席いたしましたので、ご報告いたします。

今回の大会はイコモスの役員会・執行委員会・諮問委員会等に引き続き、同市で開催されたため、東欧の参加者が多く見られました。一連のプログラムの最終部分であり、また別途、ストックホルム市周辺の見学会に一日を費やしたため、セミナーと委員会は、時間が限られ、特に最終日の委員会の参加者は20名にも足りない状況でした。

(1) 研究セミナー：

議事に入る前に、研究セミナーが開かれ、スウェーデンの他、リトアニア、ラトビア、エストニア、ロシア、ルーマニアからの多数の報告がなされました。他の報告者にも、ギリシャ、ポルトガル、スペイン、イタリア等の東欧と研究・技術協力の実績がある国々が多く、特に社会主義体制が崩壊する中で、危機にさらされている歴史的都市・集落の問題に議論の関心が集まりました。

旧ソ連邦東欧諸国では木造建造物が多く、町並み・集落が多数存在しますが、現在はその多くがスラム地区となっています。社会主義時代の合理主義的建築志向が市民の木造建築への評価を下げてしまい、下層労働者階級の家として、貧しさ、古さのシンボルになっています。旧体制時から、その保存施策は不十分で、今また資本主義経済による現代化からも忘れられた状況にあります。住民に、木造建物・町並みを大切にしない点指摘されました。

これら東欧の町並み・集落は、スカンジナビアからバルト諸国、ロシア西部を経てバルカン地域にまで及ぶ広大な木造文化圏の中心部に位置します。共通点と同時に地域性が多様に見られる貴重な文化遺産です。しかし現在の建築経済では、東欧でも木造の方がはるかに高くつく現状を考えると、危機的な状況にあるといえます。今回の委員会を通じて、スカンジナビア諸国を中心に欧州各国では緊密な協力関係にあることが確認されました。

討論の中で、カナダのM.Bonette氏は住民の啓発、行政の支援体制づくりの必要性を、また英国のD.Fowler氏は、市民に中世の暮らしを強いることは不可能であり、地元民間資本による活用、住民自身による建物への現代的機能の付加に道を開かないと、歴史的都市・集落としての木造文化遺産は残り得ない点が指摘しました。そのため、日本でも四半世紀前から全国で町並み保存運動が始まり、近年漸く民間の町家活用事例が増加し、町並みを活かした地域振興が普及した歴史を紹介し、行政の努力に加え、地域住民の意識、特に職人・技術の維持の必要性を強調しました。しかし我々経験からみて、未だに貧困から抜けだせない国々での保存活動の難しさ、すでに成長段階にある東南アジア諸国と較べてさえ、より困難な東欧の状況を痛感しました。

この他、アルゼンチン、南アフリカ、インド、ナイジェリア等新しいメンバー国からの報告があり、南アのスラム地区での住民の自助努力による町並み運動が注目を集めました。

(2) 委員会で議論された主な内容：

まず「歴史都市の観光の話題」として一部の委員からCultural Tourism Committee主催エヴォラでの「Tourism in World Heritage Cities」会議の内容に関心が集まり、またグティ財団の支援で『Tourism & Historic Cities』刊行が企画されていると紹介されました。しかし、これがCultural Tourism委員会主導で、観光業者の視点から紹介がされる恐れがある。CIVVIHとしては、例えばケベック州政府が世界遺産歴史都市ネットワークに提供している政策・制度・都市経営の内容を含む情報を提供する方法を探りたい。特に、これまでのセミナーを通じて蓄積されたCIVVIH研究レポート発刊が議論され、